

芸科卒。『饒舌家ズボン氏の話』(一九三〇・九「葡萄園」)が目に残り、泉鏡花の知遇を受けた。人生の哀歓を描くのに長じ、『鬼に雇はれたA法学士』(三三・一)「セルパン」などは、その好例。児童を主人公にしたものには『判任官の子』(三七)、『二階のない学校』(五五)などがある。

(村松定孝)

とんち話 ばなし 笑い話の中で機知で相手をへこますとんち話の主人公、彦一や彦八、孫八、また吉四六など全国的によく知られている。封建的な身分社会の中で地位も財産もない底辺の人間が知恵を働かせて、領主や名主、庄屋、町衆をやりこめたり、仕事を怠けたりする。とんち話の主人公は特定の地域の中で実在の人物として語られることが多い。たとえば江戸時代に名字帯刀を許された大分県大野郡の庄屋、廣田吉右衛門。人を笑わせる術にたけ、民衆の苦しみを救う人物であった。この吉右衛門がなまって「きつちよむ」。「吉四六話」とは、この人物を主人公とする一連のとんち話である。また、木下順二『彦市ばなし』に劇化された、彦一は熊本県。「さんによもん話」(石川県)、「おっぱらせえもん話」(広島県)、「じゅえむ(重右衛門)話」(東京湾沿岸)など、各地に、身近な話として語り伝えられている。

(西郷竹彦)

## ナ

内木文英

ふみき

一九二四〜(大13〜)

劇作家。

早稲田大学文学部卒業。中学校、高等学校に勤め、多くの戯曲を発表。高校演劇の組織化を図り、その代表者として活躍。代表的な戯曲として『祝日』『ある死神の話』『かげぼうし幻想』『オリオンは高くうたう』などがある。著書に、『劇をしましう』(一九五二)、『内木文英一幕劇集』(六九)、『内木文英脚本集』(八五)、『私はアヒルですか』(八六)などがある。現在東海大学附属浦安高校長。同望星高校長。全国高等学校演劇協議会長。全日本アマチュア演劇協議会副理事長など。

(栗原一登)

ナイト エリック Eric Knight 一八九七〜一九四

三 アメリカの小説家、漫画家。イギリスに生まれ、一五歳の時に、アメリカに移住。故郷ヨークシャーを舞台にした作品が多く、代表作に、『名犬ラッシー』(一九四〇)がある。ヨークシャーの労働者に飼われていたコ

リー犬ラッシーは、公爵に買い取られ、スコットランドの北部へ連れていかれる。しかし、四〇〇マイルを旅して、ついにもとの飼い主のところへたどりつくという感動的な犬物語である。一九四三年には映画化もされている。(桂 宥子)

内藤 濯 ないとう ちゆう 一八八三—一九七七(明16—昭52)

仏文学者、随筆家。熊本市生まれ。東京帝国大学仏文科卒。第一高等学校、東京商大、昭和女子大学で教える。戦前文部省児童図書推薦委員。ラシーヌ、モリエール、ボーマルシェなどフランス古典劇の訳業がある。

\*サンレテグジュベリ『星の王子さま』(一九五四)の訳者として名高く、作品への愛を込めた読み解きを『星の王子とわたし』(六八)にまとめたほか、『未知の人への返書』(七二)、遺稿集『星の王子パリ日記』(八四)がある。(新倉朗子)

永井 明 ながい てる 一九二一—七九(大10—昭54) 児童

文学作家。栃木県佐野市に生まれ、幼児小児マヒにかけり歩行不能となる。肢体不自由児施設柏学園で小学校教育を受けた後は独学。自伝的小説『終りのない道』(二九六九)によれば日本のドストエフスキーをめざしていたことがわかる。キリスト教児童文学の作家として『キリスト』(六〇)、『聖書の伝説』(六一)、『聖パウロ』(六三)、『聖アウグスチヌス』(六四)、『私の心のイエス』(七五)など、聖書物語を多く書いている。誠実な

作風である。

(高山智津子)

永井萌二 ほうじ 一九二〇—(大9) 児童文学

作家。東京に生まれ、早稲田大学文学部社会学科卒業。在学中、前川康男らと早大童話会で創作に励む。学徒動員で兵営生活を経たのち、一九四六年朝日新聞社に入社。「週刊朝日」で『山びこ学校の子どもたち』などをルポ。五六年、戦後の浮浪児を描いた『ささぶね船長』でサンケイ児童出版文化賞受賞。『サンアンツンの孤児』もジャーナリストの体験を生かした力作。現在、短大教授として児童文学を担当。『びわの実学校』同人。(砂田 弘)

永井鱗太郎 りんだろう 一九〇七—八五(明40—昭60)

詩人、劇作家。本名善太郎。福井県金津町に生まれる。福井師範卒業。在学中から詩作を志し、上京後は教諭のかたわら詩・児童演劇の分野で活動した。一九三六年(至一九四八)「子供町童話劇学校」(のちに「劇団子供町」)を結成、『萬葉集の頃』、『ボンチ絵の一家』などを発表。四四年に小学校を退職、以後文筆活動に入る。終戦後新劇のための『教育組合』(四六、戯曲上演)や長編童話『太陽もこどもだ』(四九)などを発表した。が、作品は児童演劇・学校演劇を本領とした。『お菓子のがみ』(四八)、『あかいおりづる』(五一)、『銀いろの雨』(五二)など、幼年劇集から中学校劇集にわたる幅広い作品は、詩人としての鋭い感覚と豊かさに裏づけられ、

型に捕らわれない独自の作風を展開している。実践的な活動の面では、日本児童劇作家協会(現在社団法人日本児童演劇協会)の設立に参画、また児童劇脚本研究「こまの会」主宰など、児童劇運動の啓蒙、後進の指導などに精力的に貢献した。代表的著作に『学校劇十二カ月』(五三)、『学校劇図説』(五八)がある。そのほか歌集『かりやす』(八四)。「お月さまをたべたやつ」(だこ) (五三)で第二回小学館文学賞受賞。そのほか日本児童演劇協会賞、日本児童文芸家協会功労賞などを受賞。

### 中尾 彰

彰なかお 一九〇四(明37) - 洋画家、(栗原一登)

童画家。島根県に生まれ、一九三二年独立美術協会に所属、現会員。四一年大沢昌助、脇田和らと「童心美術協会」を結成、斯界に画期的新風を送る。四六年「日本童画会」の創立に参加後進の育成に当たる。かたわら、東京書籍ほかの教科書編集委員および月刊絵本「こどものまど」の監修者として童画理念の確立と実践に努め、教科書および児童図書数百冊に執筆。とくに坪田譲治とのコンビで知られる。第四回小学館絵画賞を受賞。

### 長尾 豊

豊ながお 一八八九(一八八九) - 一九三六(明22) - 昭和11 児童劇作家、児童文化研究者。東京浅草生まれ。生家が娼家だったことから父親に反逆、旧制中学を三年で退学し、独学で英仏語を学ぶ。尾島満、越原富雄など、

さまざまな筆名で、青年時代から、創作、翻訳、雑文などを精力的に執筆。沼波瓊音に俳句を、島崎藤村、蒲原有明に詩を学び、小山内薫に師事して脚本も書くという多彩な活動をする。青山杉作、村田実らによって一九一二年に創設された新劇の劇団とりで社に参加して、俳優として舞台にも立っている。小山内薫の著書として刊行されている『戯曲作法』(一九一八)は、イギリスのウィリアム・アーチャーの原書よりの翻案だが、その執筆に協力しているなどの関係もあって、新聞社や映画会社に小山内の推薦で入社する。だが、これも長続きしなかった。その代わり、有楽座子供デーのための脚本を書いたのがきっかけとなり、子どものための劇や、お話に関する啓蒙的な著述を、次々に刊行する。そして、大正期の芸術自由主義教育運動とともに盛んになった学校劇運動の後を受けた、昭和初期の子どものためのお話や演劇などの文化活動に刺激を与える役割を果たした。著書の数は多いが、代表作には、次のようなものがある。『短い対話と小さい劇』(一九二七)、『お話あそびと小さい劇』(二八)、『歌とお話の戯曲化の仕方集』(二八)、『劇とお話教育問答』(三〇)、『伝説民話考』(三三)、『児童劇指導の実際』(三五)、『らくだの耳―幼児と低学年にきかせるお話四十四篇』(四三)など。

### 中川霞城

中川霞城なかがわ

一八四九(一八一七) - 嘉永2(大6)

(富田博之)

俳人、編集者。本名登代蔵、別名四明他。京都生まれ。『京都日の出』社員、京都美専講師。一八八七年『沙漠旅行物語』でハウフ童話を初訳。九〇年『少年文武』の編集発行に当たり、理科や美学に関する論説や読み物のほか、シラーのウィリアム・テル、グリム『木の馬』などを訳出。『少年園』その他にも執筆、果たした啓蒙的役割は大きい。主著『少年叢書・理科春秋』（一八九〇）、『少年狂言二十五番太郎冠者』（九二）など。

中川正文なかかわ まさふみ 一九二一〜（大10） 児童文学作家、児童文化研究・実践活動家。奈良県の浄土真宗寺院に出生。自坊の児童会で童話・童謡・劇などに親しむ。畝傍中学から龍谷大学専門部入学。東光敬より児童文学、法村康之に現代モダンバレエの指導法を習う。一九三九年仏教児童博物館に入居、上原弘毅から文学や劇の指導を受ける。四二年臨時召集、入隊。敗戦にて復学、四九年宮沢賢治論により卒業。この間、三九九年に童話作家クラブ、ついで新児童文学集団に参加。『新児童文学』別冊「機関車」を編集、童話、児童小説を発表。四九年大阪児童文化社記者。五〇年京都女子大学家政学部児童学科専任講師。このころ、松居直に会う。『月刊児童文学』を編集発行し、福音館の「母の友」「こどものとも」に作品を発表。翻訳にも着手。五八年第一回アジア・アフリカ作家会議に参加、タシ

ケント訪問。五七年より児童文化の研究と実践の場として京都女子大子どもの劇場を創設、児童劇団・合唱団を付設する。六〇年大型スクリーンによる影絵を開発。一方、六三年より弥吉菅一とともに日本児童文学学会関西例会を開く。六六年京都女子大学大学院研究科発足に当たり、児童文化学の完全な講座を敷く。八六年定年退職まで多くの研究者、教師、保育者、活動家を養成した。現在、京都女子大学名誉教授、後進の指導のかたわら善教寺住職を兼務。主著『青い林檎』（一九四九）。絵本『ころはちだいまようじん』（六八）。

中川李枝子なかかわ りえこ 一九三五〜（昭10） 児童文学作家。札幌生まれ。一九五五年、東京都立高等保母学院卒業。学生時代、児童文学同人誌「麦」の同人となり、のち、いたどりグループを結成して同人誌「いたどり」を発行。デビュー作『いやいやえん』は「いたどりシリーズ3」として五九年七月に同誌に発表された。同年、美術家中川宗弥と結婚。作品は保母体験が生かされた「切れ味のよい知的な空想世界」（松居直）を描き出しており、幼児を対象とした創作が中心。処女作『いやいやえん』（一九六二）でNHK児童文学奨励賞、サンケイ児童出版文化賞、厚生大臣賞などを受賞。想像力豊かな幼児の日常生活をユーモアを交えて描き出した傑作である。絵本作品が多いが、中でも実妹大

村百合子(六六年に結婚して山脇百合子と改名)の絵で刊行された「ぐりとぐら」シリーズや『そらいろのたね』(六四)は好評である。そのほか、『かえるのエルタ』(六四)、『ももいろのきりん』(六五)、『らいおんみどりの日曜日』(七〇)、『森おぼけ』(七八)、『たんだのたんけん』(八一)などいずれも幼児に人気を得ている。また、『そらいろのたね』が六八年度版小学校国語教科書二年生用に登場して以来教科書でもおなじみとなり、『くじらぐも』(七一年度版一年生用に登場)という教科書書き下ろし作品も人気教材となっている。(三井喜美子)

中 勘助 なか かんすけ 一八八五—一九六五(明18—昭40)

小説家、詩人。東京都出身。東京大学英文科に入学、のち国文科に移り同科を卒業。第一高等学校時代から夏目漱石の教えを受け、鈴木三重吉、寺田寅彦と並んで漱石門下の三羽鳥ともいわれた。が、彼は、いつも文壇からは離れて独自の道を歩き続けたために、孤高の作家と呼ばれている。処女作『銀の匙』は、一九一三年、漱石の推薦により『東京朝日新聞』に連載された。評論家の丸山静は、『銀の匙』の内容について、「少年少女の世界の描写は、世界にも類のないもので、この一作だけでも氏の名は文学史の上で不朽だろう」という最大級の評価を与えている。長編に『提婆達多』、随筆『街路樹』、詩集『飛鳥』などがある。子ども向きに書かれたものに、『ひばりの話』(一九四五)、『鶯』(四

五)、『白鳥の話』(四九)などの諸作がある。これらの作品からは、おおらかで静かな作者の心が伝わってくる。(鈴木敬司)

長崎源之助 ながさき げんすけ 一九二四—(大13—) 児童

文学作家。横浜市に生まれ、育ち、現在に至る。旧制浅野総合中学校五年生の時腹膜炎にかかり、中退。一九四四年陸軍兵士として召集され、華北へいく。四六年復員。以後、精粉業、古書店、文房具店、化粧品店、写真店、雑貨店など、さまざまな職業を経て、六八年から児童文学の創作に専念する。その間、四六年日本童話会にその創立とともに入会して、童話、童謡の創作に励む一方で、子ども会をつくり、焼け跡の横浜を子どもたちとともに紙芝居や人形劇をしてまわるなどの活動を行う。四九年平塚武二に師事。五〇年佐藤さとる、いぬいとみこ、神戸淳吉らと同人誌「豆の木」を創刊する。五六年『トコトンヤレ』で日本児童文学者協会新人賞を受賞。六八年『ヒョコタンの山羊』で日本児童文学者協会賞を受賞する。その作風は、自らの体験をもとにした庶民的リアリズムというべきものである。描かれる子どもたちの多くは、横浜の小さな貧しい町に住み、そこで、生き、悩み、遊ぶ子どもたちである。長崎文学の前面に「庶民としての子ども群像」があるとすれば、その基底を流れているものは徹底した「戦争に対する告発」の精神であろう。長

崎は、戦争反対を観念的にあるいは声高に叫ぶことはしない。むしろ、逆である。名もなく貧しく生きる普通の人々とその子どもたちの群像を生き生きと描くことによつて、その生活を圧倒的に支配し、破壊していく大きな力としての戦争の非情さを際立たせていく。

そこに描かれる子どもたちの生活の实在感は確かであり、この流れは『あほうの星』（一九六四）、『向こう横町のおいなりさん』（七五）、『トンネル山の子どもたち』（七七）へとつながっていく。自分の生まれ育った町、横浜の戦時下の子どもたちに執着する一方で、『人魚がくれたさくら貝』（七四）、『魔女になりたいわたし』（七五）など、現在の子どもたちへの傾斜を示す作品も数多く書かれている。また、横浜の自宅の一部を地域の子どもたちのために開放、家庭文庫「豆の木文庫」を主宰している。

「ヒヨコタンの山羊」<sup>のヒヨコタン</sup><sub>のやぎ</sub> 長編児童文学。一九六七年。この作品は、子どもたちの「豚池」での海賊ごっこからはじまる。池といつても屠畜場の汚水が流れ込み、ごみやあきかんから猫の死骸まで浮いている汚い池である。そんな池をめぐる子どもも集団の対立と葛藤を生き生きとしたイメージで描いている。物語の後半は、軍隊を脱走して逃げてくる朝鮮人のキンサンとヒヨコタンのかかわりへとストーリーは展開していく。戦争への告発を、子どもたちの日常のドラマの中

で、实在感をもつて語っていく。長崎文学の代表作である。  
(細谷建治)

中里恒子 <sup>なかざと</sup>

一九〇九〜八七(明42〜昭62) 小説家。本名恒。神奈川県藤沢市生まれ。神奈川県高女卒業。

一九二八年処女作『砂上の塔』を、のち『乗合馬車』『鎖』『歌枕』など発表、多年にわたり創作活動を続けた。少女小説に、『あいた椅子』（一九四二）、『お見舞』（四三）、『黄金の手』（四三）、『寄宿舎にて』（四四）、『春の鳥』（四七、のち改題『海辺の少女』）があり、社会的な視点から捉えられている。ほかに『かぐや姫』（五一）など。  
(棚橋美代子)

中沢巫夫 <sup>なかざわ</sup><sub>みちお</sub>

一九〇五〜八五(明38〜昭60) 小説家。東京生まれ。法政大学経済学部卒業後、フリーライターであった京都在住時代、八〇枚の歴史小説『訓練兵脱走』（二千円懸賞小説当選作、『芸芸春秋オール読物』、三月号）を書いた。その前に博文館や実業の日本社の少年少女雑誌に少年小説を発表しており、当選を機に児童文学関係の執筆が増えたものと思われる。日本児童文芸家協会の役員としての主要な役割を果たした。『敦煌物語』（一九八五）は絶筆遺作。  
(香川茂)

中島孤島 <sup>なかじま</sup><sub>ことう</sub>

一八七八〜一九四六(明11〜昭21) 小説家、翻訳家、評論家。本名茂一。長野県生まれ。

一八九九年東京専門学校(現早稲田大学)卒。雑誌「新小説」の海外文壇欄を担当し、外国文学の紹介に努める。

自らも小説『新氣連』(一九〇六)を書いたが、反自然主義運動を起こして失敗し文壇を去る。以後は児童のために、主として海外作品の翻訳に専念。『沙翁物語』(三)などを訳出する。畏友楠山正雄が中心的に活躍した\*富山房刊『模範家庭文庫』には『グリムお伽噺』(二六)、『西遊記』(二〇)、『続グリム御伽噺』(二四) 岡本帰一・久米修二(装丁・画)、『夕張月物語』(二五)を執筆。多くは原文の再話であり、当時の物語紹介の一般的姿勢がうかがわれる。坪内逍遙に勧められ『家庭文庫』の姉妹編のつもりで物語風に事実を伝えることを意図した『こども世界歴史』上・下(二一、三二)の書き下ろしがある。

中島信子

なかじま のぶこ

一九四七(昭22) 児童文学作家。長野県大町市に生まれる。東洋大学短期大学部国文科卒。大学時代山本和夫に師事。卒業後、出版社などで中学生向けの雑誌編集に携わりながら、児童文学サークル「ある研」などで創作活動を行う。少女時代の揺れ動く心を、現代の社会を背景に生き生きと描き、同世代の読者の共感を呼ぶ。主な作品に『薫は少女』(一九七〇)北川千代賞佳作入賞、『いつか夜明けに』(七八)、『水色のジュン』(八〇)、『白い物語』(八五)などがある。日本児童文学者協会の理事を務める。

長島和太郎

ながしま わたろう

一九〇八(明41) 童謡詩人。谷出千代子

人。栃木県生まれ。林逸雄、林成光などの筆名がある。宇都宮大学卒。日本医科大学、宇都宮大学などに勤務のかたわら、童謡・詩の創作に励み、リズムミカルな幼児向けの童謡を数多く発表している。『親ぶた仔ぶた』『カワイイヒヨコちゃん』が代表作。童謡集は『とんぼ』(一九七一)、『つるぎのつらら』(七六)など五冊。ほかに『詩人野口雨情』(八二)などの著書がある。日本定形詩人会理事長のほか、日本童謡協会などの役員を務める。

中谷千代子

ちやこ

一九三〇(昭5) 絵本画家、絵本作家。東京都に生まれ、東京美術学校油

画科、梅原龍三郎教室卒業。一九六三年より一カ年、夫と滞仏。絵本の絵に、『ジオジオのかんむり』(一九六〇)、『かばくん』(六二)などの文・岸田衿子とのコンビや、『あめごんごん』(七二)などの文・松谷みよ子の『ちいさいモモちゃん』シリーズ。絶筆は、『しろきちとゆき』(八一)。絵本の絵と文に、『たろうといるか』(六九)、『けんちゃんえほん』シリーズの『けんちゃんのおともだち』(七五)など、絵本の絵と共訳に、『ラオのぼうけん』(七二)。観察力の行き届いたデッサンと調和のとれた暖かい色調の絵本に、子ども向けられた優しいまなざしが感じられる。「中谷千代子絵本の世界」として、『詩情のどうぶつたち』(八四)が出版された。サンケイ児童出版文化賞大賞(六三)をはじめとして、種々

の賞を受賞。外国でも出版されている。(井上共子)

長田秀雄ひでお 一八八五—一九四九(明18—昭24) 詩人、劇作家。東京生まれ。小説家長田幹彦の兄。独逸協会付属中学卒業後、明治大学などに学ぶ。一九〇五年新詩社に入り、「明星」に詩を発表。のち木下杢太郎、

\*北原白秋らのパンの会に加わる。九年には、李太郎、白秋と詩誌「屋上庭園」を創刊。同年に自由劇場が上演したイブセンの『ボルクマン』に多大な影響を受け、戯曲の創作に熱中するようになる。二〇年、代表作となった『大仏開眼』を発表し好評を博す。三四年新協劇団結成に秋田雨雀と参加、幹事長となって進歩的な演劇運動を推進した。児童文学作品は、一九年ごろから「金の船」\*金の星、「赤い鳥」などに童話、童話劇を発表。二二年にそれらの中から八編を選んで、大正期の児童文学シリーズである『赤い鳥の本』の一冊として『鳥追船』の書名で出版。長田秀雄は、『お伽芝居』から芸術的に一段と高められた大正期の「童話劇」で活躍した数少ないひとりである。(五十嵐康夫)

永田 萌もえ 一九四九—(昭24—) イラストレーター。本名増田あけみ。兵庫県加西市生まれ。一九六九年成安女子短期大学意匠科卒業。七三年産業デザイン展印刷美術賞受賞、七五、七六年全国商業美術展連続入賞。デザイン事務所を経て七六年より妖精村チーフイラストレーターとなる。カラーインクを用い

た鮮やかな色彩が特色。「ワンダーブック」「ジュニアランド」など幼児向け雑誌の挿絵や絵本も手がける。『妖精村通信』(一九八〇)、『コスモス・パーク』(八四)など。(村中李衣)

中田喜直よしかた 一九二二—(大12—) 作曲家。名は、正しくは「へよしただ」と読む。作曲家中田章の次男として東京に生まれ、東京音楽学校ピアノ科卒、橋本國彦そのほかに師事。卒業後作曲グループ「新声会」に入り柴田南雄・別宮貞雄らを知り、歌曲「6つの子供の歌」(四七)や「マチネ・ポエチック」による4つの歌曲「(五〇)で注目され、旺盛な創造活動が開始された。女声合唱組曲『美しい訣れの朝』(六三)や『蝶』(六九)などで芸術祭奨励賞を受賞しているが、ことに充実しているのが童謡作曲の仕事で、五五年に磯部俣・大中恩らと新しい子ども歌の創造グループ「ろばの会」を結成、戦後の童謡に一時期を画した。作品集に『かわいいかくれんぼ』(五五)、『めだかの学校』(八七)などがあり、サトウハチローと組んだ『小さい秋みつけた』や『夕方のおかあさん』などの曲が有名である。歌曲では『雪の降る町を』(内村直也作詞)や『夏の思い出』(高田敏子作詩)が人口に膾炙。一九七九年より日本童謡協会の会長を務める。兄の中田一次も作曲家。(司 明生)

中西芳朗よしかた 一八九二—一九八一(明25—昭56)



口演童話家、旅行文学者。本名芳三郎。奈良県生まれ。法政大学国文科卒。奈良師範卒業後地元小学校校長を経て大正の中ごろに上京。上京後の中西芳朗の口演童話家としての活躍には、目をみはるものがある。二二

年に、同文館から『芳朗お伽噺金糸雀の歌』『芳朗お伽噺ベニスズメ』の二冊を出版。「白い花お伽会」を主宰し、全国各地を行脚。二二年、牛込区柳町の自宅にコドモ芸術学園を創設し、遠大な『学校家庭教育資料叢書』を企画、『童話美談』全四巻、『童話劇集』全五巻、『発明美談』全一卷などを出版。三四年五月、個人雑誌『童話の研究』を創刊し、四〇年ごろまで発行し、戯曲(対話劇)、評論などを執筆。ほかに、自分の子ども時代を綴った『しいやん物語』(四三三)、お話の仕方の研究書『童話の仕方』(二八)などがある。戦時中に徴用で東芝の福祉課長を、戦後は都庁の観光案内所に嘱託として長く務め、旅行文学者としてのちに『西国巡礼紀行』(七四)などを著した。(五十嵐康夫)

長沼依山 ながぬま いざん 一八九五—一九八二(明28—昭57)

口演童話家。埼玉県本庄市に生まれる。日本大学卒後東京大学の研究生となる。浦和幼稚園長、済美学園女学校長として学園経営のかたわら、一九四九年(昭24)埼玉県児童文化連盟を組織し、郷土の教育・文化に貢献する。一九年浦和共楽座の子ども会で自作の『武ちゃんのがまぐち』口演以来、口演童話家として活躍。久\*

留島武彦と親交深く回字会に属し、日本童話協会の常任理事も務めた。著書に『愛の友がき』(四六)、『親心子心』(一九五八)のほか『愛の花束』、『二宮尊徳』、『野口英世』などがある。(川上春男)

中野重治 なかの しげはる 一九〇二—七九(明35—昭54) 小説

家、詩人、評論家。福井県に生まれ、四高から東大独文科に進学してマルクス主義文学の確立をめざし、在学中には林房雄らと「新人会」を組織して積極的に労働争議に参加、また「日本プロレタリア芸術連盟」の中央委員として活躍する一方、堀辰雄らと同人雑誌「驢馬」を創刊(一九二六)、『夜明け前のさよなら』、『歌』などを発表した。「プロ芸」分裂時、久板栄二郎、千田是也らととどまって以後中心メンバーとして活躍した。

一九二八年、衆議院普通選挙の時、労働党の大山郁夫の応援で逮捕、さらに三・一五事件でも検束された。

この年「戦旗」の編集に携わり、蔵原惟人と「芸術大衆化論争」を半年間続けた。三〇年、治安維持法違反で起訴、豊多摩刑務所に収容、年末保釈出所、さらに再逮捕懲役二年執行猶予五年の刑、また三二年に治安維持法容疑で二年入獄した。以後「村の家」そのほか一連の転向小説を発表。多難な時代に生きた知識人の良心の苦悩を描いた。終戦直後、「新日本文学会」を結成した。評論に『斎藤茂吉ノオト』があるが「子ども」のための文学のこと(四七)をはじめ、教育、日本語に

関するエッセイも多い。戦時下に書いた『おばあさんの村』(五七)は着実に前向きに歩む子どもの日常生活を描いた生活童話集である。

【参考文献】浜野卓也『童話にみる近代作家の原点』(一九八四 桜楓社) (浜野卓也)

**中野みち子** なかの みちこ 一九二九(昭四) 児童文学作家。埼玉県熊谷市生まれ、一九四六年熊谷高女卒業、五〇年埼玉大学教員養成科修了、現在まで小学校勤務。六四年「児童文化の会」入会、井野川潔、早船ちよの指導を受ける。処女作『海辺のマーチ』(一九七二)は長編の問題作。『先生のおとりたい』(七三)、『七つになったけんちゃん』などでは低学年の学級や離婚の問題における児童を軽快なテンポで描く。実践を生かした子どもの本音をかいまみせる。(早川史香)

**中野好夫** なかの よしお 一九〇三(八五)明36(昭60) 英文学者、評論家。愛媛県道後生まれ。東京大学英文科を卒業し、母校の教授となったが、一九五三年に辞任。英文学が専門だが、研究視野が広く、翻訳、伝記物語などを手がける。しかも野性的な庶民感覚を有し、鋭い社会批判にも定評があった。児童文学の翻訳があり、子ども向きの『ガリヴァー旅行記』(一七二二)をはじめ、グレアム・ワイルドの『たのしい川べ』(一九〇八)の本邦初訳者であり、英語からの重訳ではあるが、チャペックの童話集『王女様と小猫の話』(四〇)は、風刺性を生か

し、リズムカルで優れた翻訳文体として評価できる。

**中原淳一** なかはら じゅんいち 一九二二(八三)大2(昭58) 抒情画家。女性雑誌の編集者として、第二次世界大戦の前後に活躍、一世を風靡した。香川県で生まれたが、

生後間もなく徳島に移り、そこで育つ。幼いころ、母より香川県の古く美しい話を絵巻物を見るように聞かされて過ごした。絵を描くことと、読書の好きな少年となる。のち上京して日本美術学校へ通う。人形をつくることに情熱を燃やし、銀座で個展を開く。それをきっかけに、二〇歳のころ、『少女の友』の挿絵を描くようになる。落谷虹児の承譜は感じられるが、堅い線の美しさは、よりモダンでしかも精神的である。第二次世界大戦が敗戦に終わると、廃墟の中から立ちあがり、ひまわり社を主宰、季刊女性誌『それいゆ』、月刊少女雑誌『ひまわり』、『ジュニアそれいゆ』を刊行、若い女性や少女に美と夢を与え、正しく上品な品性を磨くために心血を注ぐ。一九七〇年雑誌『女の部』を創刊したが病を得て一年で廃刊。歿後に画集『中原淳一画集』(一九七五)、『中原淳一画集第二集』(七七)が刊行された。(浜田けい子)

**永松健夫** ながまつ たけお 一九二二(六一)大2(昭36) 紙芝居画家。『黄金バット』を一九三〇年学生のところ、加太こうじとともに描いた。街頭紙芝居の『黄金バット』

は街頭を席捲したがピークは二年ほどであった。四七年単行本として『黄金バット・ナゾの巻』が刊行されると全国に広まった。『黄金バット・地底国の巻』『黄金バット・天空の巻』(四七)と続き、四八年『冒険活劇文庫』創刊号から、黄金バット誕生編といふべき『アラブの宝冠』を連載した。五〇年『科学魔王編』まで続くがこれは未完で終わる。(石子順)

### 中村雨紅 なかもら

一八九七—一九七二(明30—昭47)

童謡詩人、教育者。本名高井宮吉。八王子市宮尾神社事務所にて生まれる。青山師範卒業。一九一七年中村家の養子となるが、二三年養子縁組みを解消。第二、第三日暮里小学校、滝野川小学校、厚木東高等学校などで教鞭を執る。一八年ごろから詩や童謡を書きはじめ、児童の情操教育にも力を入れ、校内文集を発行。また教壇に立つかたわら日本大学高等師範部(夜間)にも学んだ(一九二四—二六)。童謡童謡雑誌『金の船』に、高井宮の名で投稿、童謡『お星さん』『蛙』、童話『お別れの先生の話』(以上一九二二)など入選。このころ、野口雨情と出会い深く傾倒し師事する。著書に『もぐらもち』(二三)、『中村雨紅詩謡集』(七一、二五九編収録)、歿後刊行された本として『若かりし日』(七五)、『中村雨紅 お伽童話第一集』(八五)などあるが、『若かりし日』は二三年に雨情の序文つきで民謡集として発刊予定のものだった。今も広く親しまれている童謡

に『夕焼小焼』『ねんねのお里』などがある。日本音楽著作権協会会員、日本詩人連盟相談役などを務めた。(西條和子)

### 中村敬宇 けいむ

一八三二—一九一(天保3—明24)

治初期に活躍した洋学者、教育家、文学博士。幼名は釧太郎、通称は敬輔、諱を正直。敬宇は号。江戸麻布に生まれ昌平黌に学び、一八六二年(文久2)御儒者となった。六六年(慶応2)イギリスに留学、六八年帰国。八一年、文科大学(東京大学の前身)教授。かつて愛読したスマイルズの『セルフ・ヘルプ』を『西国立志編』(一八七二)として翻訳出版、当時の立志青少年に影響を与えた。その後私塾同人社を設立(七三)、学生の門下数千に及んだ。さらに訓盲啞院(七五)そのほか教育啓蒙活動に力を注いだ。(桑原三郎)

### 中村新太郎 しんたろう

一九一〇—七七(明43—昭52) 児童文学作家、評論家。茨城県北馬郡小文間村(現在の取手市)生まれ。一九三〇年茨城師範二部卒業。郷里で

教師生活五年のち、上京して出版社で働いた。戦前の著書に短編小説集『村の風俗』(一九三六)、『教育学論』(四〇)がある。戦後は日本共産党茨城県委員、県委員長などを務めたが、五五年ごろから著述業に入って児童文学評論、伝記、歴史物語などで活躍した。代表作に少年少女歴史小説『天平の虹』(七〇)などがある。(来栖良夫)

## 中村星湖

せいこ

一八八四—一九七四(明17—昭49)

小説家。本名將為。山梨県南都留郡河口湖村に生まれる。山梨県立一中を經、早稲田大学英文科卒業。「早稲田文学」の長編小説募集に応募した『少年行』(一九〇七)が一等当選となり、文壇に登場した。河口湖畔の自然を背景に、そこに生まれ育った少年の織り成す人生ドラマを、堅実な写実の手法で描き出したものであり、のちの星湖文学の基調ともなった。少年文学としても読める作品である。一九一六年、相馬御風の後を受け「早稲田文学」を主宰し、評論面で活躍、自然主義文学運動の担い手の一人となる。彼の児童読み物には、『子ども聖書・旧約物語』(三三)などのほか、翻訳にバリー『ヒーターパン』(三二)、フローベル『三つの物語』(三九)、スコット『湖上の美人』(四九)などがある。

(関口安義)

## 中村千栄子

ちえこ

一九三一—(昭7—) 詩人。

本名新野千栄子。新潟県柏崎市に生まれ、一九五三年東京女子大学短大国語科卒業。童謡・合唱曲などの作詩多く、六四年詩曲集『レモンの海』、七六年童謡曲集『ツッピンとびうお』(作曲・中田喜直他)、八三年詩文集『わたしの風紋』のほか、優れた作曲家との協力による合唱組曲(女声・混声・少年少女)の楽譜が多数出版され、よく歌われ、芸術祭優秀賞、日本童謡賞特別賞を受けている。

(宮沢章二)

## 中村愔斎

ていきさい

## 中山省三郎

しやうざぶろう

一九〇四—四七(明37—昭22)

詩人、ロシア文学者。茨城県真壁町に生まれ、早稲田大学露文科卒。郷土の詩人横瀬夜雨の影響で十代より詩を書きはじめ、のち北原白秋に師事、詩集『縹緲』(一九四二)、『豹紋蝶』(四九)などがある。ロシア文学者としてはプーシキン、ツルゲーネフなどの作品を訳して名訳とうたわれ、評論集『露西亜文学手帖』(四八)もある。児童文学に関連しては、早く二二年に雑誌『夕焼』を出して童謡を書き、また県下の青柳小学校の児童自由詩集『蝙蝠の唄』(二二)の出版に尽力、弟妹三人(中山みつ・たけ・武男)を指導して「赤い鳥」児童詩のすぐれた投稿者たらしめた。

(吉田定一)

## 中山晋平

しんぺい

一八八七—一九五二(明20—昭27)

作曲家。長野県下高井郡日野村(現中野市)に生まれる。一九〇五年上京、島村抱月宅に寄寓。東京音楽学校予

科から本科ピアノ科卒業。一四年抱月率いる芸術座『復活』の劇中歌『カチューシャの唄』を作曲。二二年最初の童謡集『童謡小曲』を出版。作品数七〇〇曲を数える大正童謡の代表的な作曲家であるが、「赤い鳥」には発表せず、発表誌は「ゴトモノクニ」「少女の友」「幼年の友」など。詩は野口雨情によるものが最も多く、ついで、西条八十、北原白秋の順となる。旋律にみられる日本の伝統的な音型に加えて、口語詩の尊重、また囃子ことばの多用は童謡運動の中でも庶民性、土着性の強い作曲家と評されてきた。流行歌の作曲とともにレコード童謡を生み、童謡舞踊や少女歌手の出現にも働きがあった。主な童謡作品に『アメフリ』『雨降りお月さん』『砂山』『証城寺の狸囃子』などがある。

(若林百合子)

中山知子 なかやま ともこ 一九二六(大15) 童謡詩

人、童話作家。東京生まれ。日本女子大学を卒業して川端康成に師事した。日本児童文芸家協会、詩と音楽の会などに所属して、翻訳、創作、訳詩、作詩など広い分野で活躍している。平明でかつ格調の高い作品には、女性のみずみずしい感性が脈打っていることで定評がある。作品には、『星の木の葉』(六〇)、『夜ふけの四人』(五九)などの創作、『ミュージカル』不思議の国のアリス』などの台本、『ピエロのトランペット』『おんまはみんな』などの作詞多数。

(片岡輝)

ナギーブン ユーリー・М Юрић Маркович Гарри-  
Бин 一九二〇 ソビエトの作家。シナリオ、評論も多い。映画大学シナリオ学部卒。大戦中は「労働」紙の従軍記者。短編集『Человек с Фрунзы』前線から来た人』(二九四三)で認められる。中・短編を得意とし、平凡な人々、農民、兵士、子どもを主人公に、人の日常的な感情、自然と人間の関係を生き生きと描く。『冬のかしの木』(五三)は新任教師と村の少年の心の触れ合いを描いた秀作。ほかに『カマロフ』(五三)、『ごだま』(六〇)など。

(服部素子)

名越国三郎

なごし くにさぶろう

ナジ イシュトヴァーン István Nagy 一九〇四-

七七 ルーマニアのハンガリー語系作家。トランシルヴァニア地方の中心都市クルージュの出身で、第二次大戦前から労働運動に参加。同時に小説家としてハンガリー人、ルーマニア人の労働者や農民の姿を大河小説に描いた。児童文学の代表作『キンタ横町の少年た

ち(一九四七)は、第二次大戦末期のクルージュの貧民街に生きる少年たちを描いた傑作である。(直野 敦)

**那須辰造** たすぎ 一九〇四(七五)明37(昭50) フランス文学者、児童文学作家、能楽評論家、俳人。和歌山県田辺に生まれる。一九二九年東京大学仏文科卒業、第一〇次「新思潮」同人となって文学志向が強まる。

『芸芸レビュー』『雄鶏』などの同人となり訳業に創作に活躍、少年の心理的葛藤を悲劇的に描いた短編小説『釘つけする家』『鯛舟』『次郎兵衛物語』『哀傷日記』がある。戦後間もなく愛児の死に遭い虚脱状態に陥ったが福士幸次郎に励まされて児童小説を集中的に執筆する。中でも愛児が冒険にあこがれていた思いに発想して冒険とヒューマニティーの結合をめざした代表作『緑の十字架』(一九五五 産経児童出版文化賞受賞)がある。訳書に『トゥドゥーズ』『かもめ隊の少女』、ジョルジュ・サンド『かもめ岩の冒険』、伝記に『芭蕉物語』『ナポレオン』『ジンギスカーン』『葛飾北斎』など数十巻がある。同人誌「メルヘン・サークル」を主宰、実践女子大学教授、日本児童文芸家協会理事の任にあった。

(滑川道夫)

**那須田 稔** なすだ 一九三二(昭6) 児童文学作家。静岡県浜松市生まれ。幼少年期満州(現中国東北地区)にて過ごす。浜松西高を経て東洋大学国文科、愛知大学中国文学科中退。その後児童文学の創作を中心

とする著述活動に専念する。塚原健二郎に師事し「大きなタネ」の編集に携わる。処女作『ぼくらの出航』(一九六二)は当時としては珍しく、支配者日本が、被支配者に逆転した、満州ハルピンを舞台に、日本少年山崎と、中国人、朝鮮人少年および白系ロシア人少女たちの真の国際連帯を求めた作品で、講談社児童文学新人賞(六二)となる。国境の街で日本の少年と白系ロシアの少女の交流を厳しい世相を背景に描いた抒情的作品『シラカバと少女』(六五)は、日本児童文学者協会賞(六六)となる。さらに昔話シリーズ『おとぎばなし』(六七)は、毎日出版文化賞(六七)を受賞する。那須田稔の作品には『土の童子』(七〇)、『小さな草の歌』(七〇)、『雪割草のように』(七二)、『でいだらぼっち』(七二)など、伝承などをもとにした作品系列と『ぼくらの出航』『シラカバと少女』『砂漠の墓標』(八〇)など自伝的系列のほか『ひめゆりの少女たち』(七〇)などノンフィクション文学の系列がある。児童文学界に登場して早々からヒット作品に恵まれた作家那須田稔は、今は郷里に帰り出版人に変身して、ひくまの出版を興した。作家としても捲土重来を期している。

(代田 昇)

**那須正幹** なす 一九四二(昭17) 児童文学作家。広島市生まれ。島根農科大学林学科を卒業し、商事会社勤務を経て、家業の書道塾を一〇年間手伝う。この間、広島児童文学研究会に参加するとともに、実

姉の竹田まゆみと同人誌「きょうだい」を刊行した。

第二回学研児童文学賞に入選した現代の宝探し物語

『首なし地ぞうの宝』(一九七二)の刊行以後、異色の競争児童文学『屋根裏の遠い旅』(七五)、シヨートシヨート集『少年のブルース』(七八)、少年たちの心理と行動を追求した『ぼくらは海へ』(八〇)、「原爆の子の像」を巡るノンフィクション『折り鶴の子どもたち』(八四)

などが代表的な作品である。一方、エンターテインメントに属する作品も多く、中でも『それいけズッコケ三人組』(七八)以下、三人の少年の日常と冒険をさまざまにテーマと手法でユーモラスに展開するズッコケ三人組シリーズは、すでに一〇冊を超え、膨大な読者を獲得している。その多彩な活動から、現代を代表する作家の一人といえる。

(長谷川 潮)

なぜなぞ 「なにはな(ん)ぞ」と問いかけて、相手に答えさせる言語遊戯は、世界各地で各様の発達を遂げた。日本でも、早く八世紀の藤原浜成の歌論書『歌経標式』に、「胤の家(穴)米搗き飾ひ(粉)木を伐りて引き鑽り出だす(火)四つ(し)といふかそれ」という歌の謎がみえる。「あな恋ひし」が隠してある。一〇世紀の『枕草子』や『小野宮右衛門督家歌合』にも、なぜなぞ合わせが行われたことがみえる。これらは新作謎の競作だが、既成の謎での遊びも盛んになった。一六世紀の世に『後奈良院御撰何曾』の名で知られている「な

ぞだて」は、濡れ文(間)―乾海松(答)「乾して見る」のような二段構造だったが、近世中期には、何はなんぞぞ、答はなに、そのころは?と説明する三段構造の、ひねりのかかったものが流行し、現在でも落語や漫才に盛んに使われているが、「オストアンデル」(饅頭)のような外国語をまねた単純なしゃれも出てきた。

(益田勝美)

### 夏目漱石

ちつせき 一八六七―一九一六(慶応31大5)

小説家。本名金之助。江戸牛込(現東京都新宿区)の生まれ。一八九三年東京大学英文科を卒業。第一高等学校時代に正岡子規を知り終生親交を結ぶ。松山中学、第五高等学校の英語教師を経て、一九〇〇年イギリスに留学。帰国後、東大でその成果を「文学論」「文学評論」として講じた。かたわら『吾輩は猫である』『漱虚集』の諸短編、『坊っちゃん』『草枕』などを〇五年から〇六年にかけて次々と発表、一躍文名があがった。

〇七年朝日新聞に入社し職業作家となった後は、『三四郎』(一九〇八)、『それから』(一九〇九)を経て『だいに知識人の内面を倫理的に追求する傾向を強め、『門』(一九〇)、『行人』(二二―一三)、『こゝろ』(一四)、『道草』(二五)、『明暗』(二六)などの作品を残した。洗練されたユーモア、鋭い文明批評性、潔癖な倫理感、国民作家として幅広い支持を受けているが、吾輩は猫である』や『坊っちゃん』は児童の読者にも根強い人気がある。

ある。

(石崎 等)

奈街三郎 なまじ さんごろう 一九〇七(七八(明40(昭53)) 童話

作家。本姓山田。仙台市に生まれたが東京で育つ。東

京商業学校卒。雑誌「童話」に投稿、一八歳の時犬を

主人公にした一〇枚の童話「二つの生活」が小川未明

選により一位入選。以後、未明に師事する。一九二五

年、「新興童話作家連盟」の結成に参加。三一年、幼年

雑誌「ゴドモノクニ」の編集長に就任。その後、「ゴド

モノヒカリ」、「お話の木」(小川未明主宰)、「こどもペ

ン」と編集者生活を続けながら創作に励む。三七年、

第一童話集『海へ行った靴』を刊、続いて『かたつむ

りの旅』(一九四二)、『ハサミとようふうくや』(四八)、

『とけいの三時くん』(五八)を世に送った。その作品

は、(1)子どもの日常生活に題材をとった生活童話、(2)

動物や道具を擬人化した寓話風幼年童話、(3)風刺を交

えた抒情性のあるメルヘンに分類できるが最も才能を

発揮したのは幼年童話である。都会風の感覚とシニカ

ルな人生観を導入し幼年童話を児童文学の一ジャンル

にまで高めた。五二年には、第一回小学館児童文化賞

を受賞。晩年は宗教団体の創備学会に入会し児童文学

の友人から離れ、同学会の創立者、牧口常三郎、戸田

城聖の開設した学習塾に題材をとった『小説時習学館』

(七三)を書いている。なお、第二次大戦中は、筆名をや

した。

「とけいの三時くん」(とけいのさんじくん) 幼年童話の代表作。一

九五八年。時計を時間の集合体であるビルディングに

みため、その中の住民の一人三時くんの失敗を軽快な

文体でユーモラスに描いた短編。三時くんは猫のトム

公とネズミの婚礼にかけ、そこで寝込んでしまひ午

後の三時を鳴らせない。「三時がなかったから子供がみ

んなおやつをわすれてくれました。こんなことはあ

とにもさきにもこの日にちだけでありました。」と作

品を結んでいる。(塚原亮二)

滑川道夫 なめかわ 一九〇六(明39) 児童文

学研究者、教育学博士。秋田県湯沢市に生まれる。一

九二六年秋田師範、三八年日本大学国漢科卒業。成蹊

学園に勤務(至一九六一)、同校主事、学園教育研究所長

を歴任。読書指導の実践的研究をはじめ。文部省児

童図書推薦の調査委員、「教育科学研究会」(城戸幡太

郎)言語部会に所属して、国語教育、児童文化・文学の

研究に取り組む。戦時統制期には「日本少国民文化協

会」文学部に所属し、戦後は作文教育、読書教育、児

童文化・文学の面で業績を残し、学校図書館運動の草

創期には先導的役割を果たした。一方、山本有三のも

とで少年雑誌「銀河」の初代編集長(一(五号)として活

躍。六一年より東京教育大学・お茶の水女子大学など

で戦後最初の児童文学講義を担当した。また、日本児



児童文学学会の創立(六二)に尽力し、第二代目の会長となる。その間野間児童文学賞・小学館文学賞・芸術選奨文部大臣賞文学部門などの選考委員を歴任。戦前期から児童文学資料の収集家としても著名である。著書に『としよかん』(五〇)、『少年つづり方作文全集』一〇卷(五五)、サンケイ児童出版文化賞、『子どもの詩の教室』(六三)、『児童文化論』(七四)、『桃太郎像の変容』(八一)、毎日出版文化賞、作品に『野口英世』(七二)、『行動半聖二〇〇メートル』(六七)、『手旗信号』(七二)などがある。(浜野卓也)

**奈良絵本** ほんえ 室町後期から近世はじめにかけて流行した肉筆彩色の絵入り本。お伽草紙の物語絵巻を詞と画で交互に出てくる冊子本に仕立てた新形式のもの。一作品が二ないし三冊の薄い本からなるものが多い。大型縦本や横本が主で、のち中型縦本も出てきた。たとえば『文正草子』は、絵巻物から奈良絵本になり、墨絵木版の御伽文庫にもなっている。絵巻物の純大和絵をやや簡略化した奈良絵と呼ばれる画風に近く、奈良絵本の名がついたのは明治時代になってからで、奈良の絵仏師が手がけたのではない。画も素材でこの形式最古のものとされる『花鳥風月』は、詞・画ともに飛鳥井栄雅卿の息女一位の局の作とされ、草創期の作者の社会的階層をうかがわせるが、多くは京都の草子屋や絵屋が手がけたとみてよいだろう。木版印刷の御

伽文庫の流行後衰退し、ごく少量が公卿や大名の姫君のための賞玩物としてつくられることになった。(益田勝美)

**奈良島知堂** ちどう 一八九二(明25) 口演童話家。本名正三。東京本所生まれ。口演童話家から趣味講演家として独自の話芸を確立する。青山師範卒業後日本大学に学ぶ。一九一九年教員生活を退き口演童話に専念。品のある講談調の話法は少年少女ばかりでなく幅の広い聴衆層をもつ。とくに家の光協会の講師として数年間巡回口演を続ける。六九年喜寿を迎え講演活動から引退する。主な話材「湯川博士の少年時代」「野口博士の少年時代」「小判の賀籠」「報いの矢」「夜叉若」「二つの袋」「お山の尊念さん」「火の子水の子」など。(川上春男)

**成田為三** なりた 一八九三―一九四五(明26―昭20) 作曲家。一九一四年東京音楽学校甲種師範科入学。山田耕筰について作曲を学び、一五年には『浜辺の歌』(林古溪詩)をつくっている。一七年卒業の後、佐賀師範教諭となったが、作曲研究のため上京。一九年に発表された『赤い鳥小鳥』と『かなりや』(西条八十詩)は好評で、成田の名は全国的に知られるようになり、童謡の作曲に自信をもち創作童謡の運動に尽くした。ベルリンに四年間留学し、ドイツ・ロマン派系のローベルト・カーンの教えを受け帰国後は、当時、日本の楽

団に紹介されていなかった対位法・和声学などの音楽理論書を著作。彼の歌曲は初期ロマン派のスタイルをもち、童謡も基本的には唱歌のスタイルをとっているが、きわめて斬新で芸術的童謡の土台となった。

(司 明生)

南江治郎 なんえ じろう 一九〇二〜八二(明35〜昭57) 詩人、人形劇研究者。筆名に二郎も用いた。京都府亀岡市に生まれ、早稲田大学専門部を中退。日本ではじめての現代人形劇雑誌「マリオネット」(一九三〇〜三二)、「人形芝居」(三三〜三三)を編集・発行。著書に論文集『人形劇の研究』(二八)、『世界偶人劇史』(三三)があり、国粹化傾向の強い時代に、客観的な判断材料を冷静に提供し続けた。戦後ユネスコ委員として欧米に留学、代表作『世界の人形劇』(六八)その他を出版。元NHK専務理事。

(中谷正尚)

ナンセンス nonsense 一般的には「無意味、馬鹿らしさ」などを表すが、文学上ではナンセンス詩、ナンセンス・テール、物語のように用いる。ことば遊びをも伴うことがあるが、現世的な価値観、既成概念の崩壊、秩序からの脱却が潜んでいて、その本質は自由と解放にある。ちょうど現実とのさかさまの世界が象徴するように、奇妙なおかしさと遊びの感覚にあふれ「意味・無意味」へ常識・非常識」という概念を超えたところに成立し、精神の自由への欲求の文学と考えられる。

昔話やわらべ唄にも宿っているが、独自の文学として伝統化したのは、イギリスであった。わらべ唄をはじめ、五行俗謡のリメリックや、「さかさまになった世界」(一八世紀)などのチャップブックにも豊かに宿っている。リメリックの影響を受けてリアの『ナンセンスの本』(一八四六)が生まれ、ルイス・キャロルの二つの「アリス」を経て、H・ペロック『悪い子の動物の本』(九六)、E・リンクレイター『月に吹く風』(一九四四)、E・シュータ『ほらふきマックス』(六三)、S・ミリガン『子どものためのばかげた詩』(同)などの流れをつくった。なおアメリカにも、『ルータバガ物語』(二二)を書いたC・サンドバーグ、『ティラ・リラ』のL・リチャーズ、『オウル・ボール』(三六)のG・ラウンズ、『ぞうのホートン卵をかえす』(四〇)のS・スミスなどのナンセンス風の作家や詩人たちがいる。そのほか、ソビエトのネクラソフ『ほらふき船長航海記』、チェコスロバキアのK・チャベック『長い長いお医者さんの話』(三二)、ポーランドのケルン『おきなさいフェルディナント』(六五)などにも、ナンセンスの着想がある。日本の風土ではナンセンスはなじみにくく、戦前では排斥される傾向にあったが、千葉省三の『ワンワンものがたり』(三三)などがあり、戦後になって関心が寄せられ、平塚武二『いろはのいそぶ』(五三)、寺村輝夫『ぼくは王さま』(六一)、谷川俊太郎『ことばあそ

びうた』(七三三)、舟崎克彦『ぼっぺん先生の日曜日』(七三)などに、ナンセンスの香りを嗅ぐ。(原 昌)

南部修太郎

宮城県仙台市に生まれ、慶応大学文学科

卒業。在学中から「三田文学」に翻訳や小説を発表。

卒業後同誌の編集に従事。三年後、芥川龍之介に師事し、文筆生活に入る。『若き入獄者の手記』(一九二四)、長編『返らぬ春』(二二)その他の著作がある。児童ものは『赤い鳥』に『小人の謎』(一八)をはじめ三作を、『童話』に『笛の手柄』(二六)一作を寄せている。ほかに多くの令女小説・少女小説があり、『鳥籠』(二二)、『月光の曲』(二七)などに収録されている。(関口安義)

## 二

新関健之助

一九〇〇〜五三(明33〜昭28)

漫画家。東京浅草に生まれ、東京府立第三中学校卒業。区役所勤務、挿絵画家を経て、漫画に専心する。戦前は新関青花名で、『トツカン水兵』(一九三四)、『象さん

豆日記』(三九)、『北極探険』(四〇)など、主に中村書店で単行本を出版。戦後は雑誌に舞台を移して、良心的な幼年漫画を数多く残した。代表作にユーモアあふれる動物漫画『かば大王さま』(一九四九〜五三)『小学三年生』がある。(竹内オサム)

新美南吉

一九一三〜四三(大2〜昭18)

文学作家。本名正八。新美は母方の姓。愛知県知多郡半田町に生まれる。中学二年のころから文学に興味をもち童話、童謡、詩、小説など広く読み上級生と同人誌『オリオン』を出す。一九三一年中学を卒業。小学校代用教員を務めるかたわら『赤い鳥』に投稿、童話『正坊とクロ』『張紅倫』などが入選、またその童謡も北原白秋に認められ、門下の巽聖歌らによる童謡誌『チノキ』に参加する。翌年東京外国語学校英語部に入学。『こん狐』はこの年の『赤い鳥』一月号に掲載されている。しかし白秋が鈴木三重吉と不和、『赤い鳥』を去ったことで、門下の巽とともに南吉も『赤い鳥』を離れる。三五年、童話集刊行の話がありユニークな幼年童話三〇余編を一気に書くが、刊行に至らなかった。三六年卒業したが志望の教職につけず、神田の貿易商會に勤めたが、二度目の咯血をして帰郷。翌三七年郷里に近い河和小学校の助教、さらには杉治商會で、屈辱的低賃金の生活の中で悶々として日を送ったが、三八年県立安城高女の教諭となり以後生活の安定の中で